金綱集の検討

——浄土宗見聞上・下について——

中條暁秀

(一) 金綱集について

金綱集は身延二祖日向（一二五三—一三一四）が、宗祖晩年の身延山での講義を聴聞・記録し、自ら見聞するところを追加して、これを諸宗破立・問答用意の大綱の心得たらしめるために、広く諸宗の経・論・釈・疏の文言を渉猟して、これを例えば「華厳宗見聞」・「真言宗見聞」等と諸宗に配して整理篇輯して、総括して『金綱集』と題されたものである。(1)

古来より身延門流の秘書として重んぜられた有名なもので、現存の写本は身延三世日進・四世日善、及び日王丸等の手によってなり、また、中山門流では三世日祐の弟子分である等覚院日全（——一三四四）その他の人々によって筆写された。その時期は嘉暦から建武の頃、すなわち、日向入寂の正和三（一三一四）年から、十四・五年～二十二・三年の後に、多くの人々によって書写されているものである。(2)

日祐の『本尊聖教録』には「金綱集　十帖」（宗全一—四二一頁）・「金綱集　十帖抄」（同）と記し、茂原妙光寺四世日海の『初心行者位見聞』には「日向御書　十帖」（写本立正大蔵・第一一ノ一九頁右）と記し、古来十巻本

であったことが知られるが、現今の金綱集は十四帖となっている。これは調巻の異なりと同時に他の書目が加わったためと考えられている。[3]

周知のように金綱集は、宗祖直弟の著作としては最も大部のものであるが、金綱集が何ゆえに編まれたかは不明である。ただ宗祖が再三にわたって『一代五時図』・『一代五時鶏図』等を図示されていることから見て、恐らく金綱集述作の縁由は『日蓮宗事典』[4]も指摘するように、『一代五時図』等に基づく釈尊一代の教説の位置づけと、各経典を依経とする各宗の位置づけ、等を継承することにあって、それをさらに綿密にして、諸宗の主張を明瞭にすることが、その主眼であったと考えられる。すなわち、『一代五時図』等が華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時教判を中心として、それに対する各宗の配当を図示するのに対し、金綱集は各宗を柱として、その宗の依経、依論、祖師、三国相伝などについて縷説し、その特徴的教義を掲げている。[5]要するに、金綱集は諸宗の破折もさることながら、各宗の主張の紹介に重きが置かれているという点が注目される。つまりそれは、諸宗の破立の素材として金綱集が編まれた、と解すべきであろう。

ところで、金綱集には宗祖の遺文と共通する文がかなり散見される。すなわち、『法華真言勝劣事』及び『真言見聞』が、金綱集の「真言宗見聞」と、『本門戒体抄』が金綱集の「小乗三宗見聞」と、それぞれ全面的に共通する。そして、例えば定遺続編所収の『真言宗見聞』の約八割、曽て身延山に存した『祈禱抄』の後半部分、同じく身延曽存の『聖密房御書』の中程の約九百字が、金綱集と共通するのである。その他、類似乃至僅少部分共通のものは数多く存する。[6]

加えて、宗祖滅後の上代には、金綱集と基盤を共通する典籍が数点存し、[7]特に日全の『法華問答正義抄』（写本立

正大蔵）は、金綱集を「久遠寺抄」・「久遠寺御抄」と呼んで重視しているのである。[8]

なお金綱集の「真言宗見聞」と『法華真言勝劣事』・『真言見聞』の二書との関連については、宮崎英修博士が『不受不施派の源流と展開』に詳述され、[9] 浅井円道博士は金綱集の「真言宗見聞」を論の中心に据えて、遺文・金綱集・法華問答正義抄の真言批判の素材についての対比を『大崎学報』一三五号に論究され、[10] 金綱集の「小乗三宗見聞」と『本門戒体抄』との同異については、宮崎先生の古稀記念論文集所収の拙稿を、[11] それぞれ参照願いたい。

(二) 「浄土宗見聞」上・下の検討

宗全一三巻所収の金綱集第四「浄土宗見聞」上、第五「浄土宗見聞」下、の内容項目は左の表（Ⅰ）の通り、上が十一、下が二十三の三十四項目である。

表（Ⅰ）

第四巻　浄土宗見聞（上）	（宗全一三巻の頁数）
1、浄土宗三経一論事	一一〇
2、浄土宗祖師事	一一〇
3、血脈事	一一一
4、無量寿経（巻上）	一一一
5、阿弥陀経	一一三
6、観無量寿経	一一四

7、散善義（善導）　一二九
8、往生礼讃（〃）　一三五
9、観念法門（〃）　一三六
10、玄義分（〃）　一三九
11、選択集（法然）　一四一
奥書　一五七

要文抜萃

第五巻　浄土宗見聞（下）

1、法体過失事　一五八
2、未顕真実事　一六〇
3、祖師謗法事（タイトルのみ）　一六三
4、曇鸞法師難行易行事　一六四
5、同難破事　一六四
6、道綽禅師聖道浄土事　一六七
7、同難破事　一六八
8、善導和尚立正雑二行事　一六九
9、同難破事　一七〇
10、法然門弟等諸説事　一七二
11、法華経与観経前後事　一七五
12、法華弥陀与観経弥陀一異事　一七七

13、天台念仏事　一八一
14、善光寺阿弥陀仏違目事　一八六
15、慧心僧都並永観律師事　一九〇
16、法然事（略歴のみ）　一九〇
17、浄土宗七箇制誡（七箇条起請文）　一九一
18、善導和尚遺誡　一九三
19、称名問答集　一九四
20、大勢至菩薩経　一九六
21、首楞厳経　一九七
22、浄土宗立義事　一九八
23、念仏者所追事　二一四
奥書　二二一

要文抜萃

本来ならば、その内容の逐一を述べねばならぬであろうが、今は控える。ただし、上・下二巻について大雑把にいえば、上は浄土宗の依経・依論の要文抜萃で、下は浄土三師の主張の紹介とその難破、以下浄土家に関する素材の提供である。

拙稿は、三十四項目中に引かれる経論釈とその吟味、宗祖の念仏破の次第とその比較、そして、破立の素材の一つとして『浄土初学抄』が用いられている。の三点に問題を絞り込み、考察するものである。

なお以下少しく論の展開を試みるにおいて、金網集の対浄土宗観の根底にあるものは、下の1、「法体過失事」・2、「未顕真実事」中に象徴されるところの権実判に立ち、最澄の『照権実鏡』の「方便説。故暫用後捨。」（伝全

二―七頁）を援引して、浄土三部経を方便権教と判ずるという、いわゆる爾前無得道論にあることを前もって念言するものである。

(a) 引用経論釈とその吟味

諸宗の破立の素材として金綱集が編まれたと前に述べたが、浄土宗見聞上・下には浄土宗関連の典籍がほぼ網羅され、厖大な書冊が引用されている。今、その主たるものを挙げると、まず浄土三部経、法華経の方便・分別功徳・薬王の三品、無量義経、涅槃経、報恩経、鼓音声経、平等覚経、不思議諸仏所護念経、無量寿観行供養儀軌、往生論、十住毘婆沙論、往生論注、安楽集、善導の五部九巻の書、文句、玄義、止観、弘決、文句記、大論、観智儀軌、法華三昧懺儀、十疑論、起信論、西方要決、群疑論、慈雲伝、霊応伝、照権実鏡、日本書紀、五祖伝、往生伝、選択集、一期物語、唯信抄、往生拾因、他、表（Ⅰ）の項目の典籍等々である。

そして、引用経論釈を丹念に検すると、ほぼ正確に記され、現時点未検索なものは、閻王懺悔経、慈雲伝、四天王寺日記、聖徳太子伝、表（Ⅰ）の下の18、・19、・20、等である。

これらの中、遺文に見られぬものは、今いう未検索な典籍と不思議諸仏所護念経、無量寿観行供養儀軌、唯信抄（聖覚の名は引く）等である。

ところで、宗祖の弘教の基本姿勢は折伏にあって、その教学の特色の一つに充分に吟味された経論釈等を引用して、自説の援証とする文証主義が極めて旺盛であることは周知の通りで、かかる姿勢は金綱集にも貫かれている。すなわち、道綽が『安楽集』に引く大集経の月蔵分の文と、智顗撰といわれる『浄土十疑論』との吟味態度を見れば明瞭である。

一に、宗祖は『一代五時図』（定遺二二八四頁）・『和漢王代記』（同二三五四頁）の図録二書に、「安楽集云、大集月蔵経云我末法時中億々衆生起行修道未レ有二一人得者一 当今末法是五濁悪世唯有二浄土一門一可二通入一路」と述べるに留め、その吟味はない。しからば、金綱集はというと、表（I）の下の7、「道綽難破事」に、「此文都大集経無之、其上文言可レ有様ナシ、・・・・・・・・・・・・此師之誤」（一六九頁）と喩し、日全の『法華問答正義抄』は金綱集に準じて、「有二月蔵経何処一」（七頁ノ裏）と決め、行学日朝に至ると「月蔵経ニ今ノ文無レ之、憶説也」（宗全一五―八六頁）との断を下すのである。

因に浄土家にあっては、大集経のかかる一文について、三祖良忠が『選択伝弘決疑抄』に「此レ取意ノ文ナリ」（浄全七―一九五頁）との言で、以下この取意説を踏襲している。[12]

次に、天台智顗の『浄土十疑論』についてであるが、宗祖は『一代五時継図』の「天台念仏事」中に、「十疑第四云・・・・・」（定遺二四三九頁）として本書を引用している。いうまでもなく『浄土十疑論』は、往生浄土に関する十箇の疑問を掲げ、それに回答を示して西方往生を勧めたもので、古来智顗の真撰であると信じられて来たが、現在では後代の仮托の書であることが学界の定説となっている。[13] なお偽作説が定着する迄の紹介及びその背景等については控えるが、[14] かかる偽作説を最初に唱えたのが、法然と時代を同じうした叡山の宝地房証真である。証真は『法華玄義私記』の巻五の末に、[15] (1)智顗より後出の玄奘訳の『阿毘達磨雑集論』を引く事、(2)『西域記』によって、世親・師子覚等の旧話を転載するという事、の二点を指摘して、智顗真撰説に疑問を投げかけたのである。

翻って、金綱集は下の13、「天台念仏事」中において、恐らく『法華玄義私記』からの取材であろうが、指摘の二点を厳しく吟味して、「今云十疑ニ一論一伝ヲ引ケリ倶ニ新訳也、大師之御在生之時無レ之、如何可レ被レ引乎、・・・

・・・・・・・・不審無レ極者也」（一八六頁）と結んで、智顗仮托説すなわち偽作説を力説するのである。

因に、良源の『極楽浄土九品往生義』[16]、源信の『往生要集』[17]、法然の『浄土初学抄』[18]等々には、十疑論が重用されている。

(b) 念仏破の次第と金綱集

「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」とは、宗祖の諸宗破折を標語化した成句で、「四箇格言」として有名である。

今は、宗祖の念仏破の次第を一瞥して、金綱集と比較する。

まず『南条兵衛七郎殿御書』（定遺三二六頁）・『四条金吾殿御返事』（同六六三頁）・『妙法比丘尼御返事』（同一五五三頁）等によれば、幼少の頃は宗祖も弥陀念仏を信仰していた、との述懐がある。

二に、その弥陀信仰と訣別していたという典拠が、二十一歳の処女作の『戒体即身成仏義』（同一一～二頁）である。

三に、正嘉二年三十七歳の『一代聖教大意』（同七四～五頁）は、未だ浄土宗の祖法然を批判する迄には至っていない。

四に、宗祖の法然批判の初出は正元元年三十八歳の『守護国家論』で、その序文（同八九～九〇頁）にも示されるように、専ら法然の著の『選択集』を破折するための書で、謗法の書と決せられている。しからば、何ゆえに宗祖は謗法の書と断定されたのか。定遺一〇四頁・一〇七頁によれば、それは浄土三師及び源信は、法華真言を捨閉閣抛の対象から除外したにもかかわらず、法然は「準之思之」して、法華真言をも難・聖・雑の中に含め判じたところに謗法の根源あり、と断ぜられている。当然のごとく本書の批判の対象は法然であって、浄土三師には及んでいない。な

お『災難対治抄』（同一六七頁）・『立正安国論』（同二一四～五頁）・『一代五時図』（同二二八三～五頁）等は、『守護国家論』の分域内の書で、法然破である。

五に、浄土三師に対する批判の開始は、弘長二年四十一歳の身延曽存の『顕謗法抄』で、「曇鸞・道綽等の聖道浄土・難行易行・正行雑行は、源と十住毘婆娑論に依。彼本論に難行の内に法華真言等を入と謂は僻案なり。論主の心と論の始中終をしらざる失あり。」（同二七〇頁）と、述べられるのがそれである。つまり浄土三師が龍樹の意を曲解して、難行道の中に法華真言を摂入したとするの意である。したがって、これ以降宗祖は、法然は勿論のこと浄土三師批判を色濃くすることこそあれ、撤回されることはない。以下宗祖は、「念仏法華一体義」、「天台宗の念仏に対する批判」、「天台・伝教の念仏」、「恵心の往生要集」、「佐渡以降の念仏批判の展開」、「念仏・真言両批判の軽重」等々についての展開を試みられているが、今は略す。なおかかる件については、浅井円道先生の「法然房源空と宗祖日蓮」[19]・「宗祖対法然房」[20]中に詳述しておられる。

さて、叙上の念仏破の次第を踏まえて金綱集を披見すると、

(1) 金綱集は鸞・綽・導の浄土三師が法華を難・聖・雑の中に摂入するか否かについて、表（I）の下の4、・5、・6、・7、・8、・9、中に展開され、その回答はそれぞれの「難破ノ事」中に説示されている。曇鸞は「若除二法華経一云筆無レ之者、以二妙経一入二難行道一事曇鸞之意明」（一六五頁）と、道綽は「浄土往生之経ヲ除外ヲ皆摂二聖道一云事、道綽意明」（一六八頁）と、善導は「善導ノ意、雑行入二法華経等一事分明也、・・・・・・・・・・・・・・善導天魔也」（一七〇～一頁）との結である。

(2) 金綱集にあっては、宗祖が佐前にいう「正法ハ法華真言」との言は全くなく、「念仏真言等ノ謗法ハ・・・・・」

（一七二頁）との断である。

(3)幼少期の弥陀信仰→その訣別→法然破→浄土三師破、の展開となる念仏破の年序的経過について金綱集は何ら語らない。

因に、日全の『法華問答正義抄』には「私云」として、「安国論不破三師但破法然也」（五一頁裏）との言を見る。

(4)宗祖が法然に用いた、いわば謗法の代名詞「准之思之」の四字について、金綱集は全く語らず、ただ下の11、に「観経等ハ法華已前ト定ムル上ハ、・・・・・・・・法然上人、観経之読誦大乗ノ句ニ法華経ヲ摂シテ、爾前経中何摂法華ト釈シ、観経等ハ法華以前之経タル事・・・・・経文朗然・・・・・・・・・今更不レ可レ有二新義一也」（一七七頁）との爾前無得道論に立脚しての言を見るのみである。

の四点が挙げられよう。

再言するようであるが、宗祖は念仏批判の対象として法然をその初期において大いに研究し批判し、初期日蓮教学樹立のための、いわば浅井博士の言を借りるならば、アンチ・テーゼとすらしておられた感がある。さすれば、金綱集には当然法然破、特に「准之思之」の四字考等の論断があって然るべきであるのに存せず、一見奇異に感ずるところである。が、しかし、念仏破の次第を省略し、直ちに「浄土三師破」の展開を試みるという構成から見て、その論及等は今更必要とせず、との判断のゆえからであろうか。

(c)　金綱集と浄土初学抄

「浄土宗見聞」上・下を通観していえることであるが、本書中最も頁数を割く項は、下の22、「浄土宗立義事」である。そして、注目すべきことは、この「浄土宗立義事」は遺文にも引かれず、かつ出典も明示されぬ法然著の『浄

土初学抄』を下敷として、成っているということである。

まず「浄土宗立義事」の構成をいえば、下の6、と同名の「道綽禅師聖道浄土事」という序を設け、それをさらに十一の細目にして、例えば難行道の文証はとの問いに十住毘婆沙論を掲げ、自力他力の文証如何として浄土十疑論を示し、三部経の例示あるや否やとして鎮護・法華の三部等の答を明かす、等々の問答往復がなされ、次いで表（Ⅱ〈b〉）のように、「問、真言中明二念仏往生一乎」（二〇一頁）という真言宗から始まって成実宗に至る十二宗（ただし、禅宗は除く）に、『浄土初学抄』を下敷としたところの念仏往生の義を明かすための記述がある。

一方『浄土初学抄』とはその名がいみじくも示すように、法然が浄土宗入門者のための必読の書として著わした有名なもので、その内容は二段に分かれている。前段は浄土十疑論、西方要決、往生要集を用いて、諸宗の学者倶に念仏を修すべき旨を明示し、後段は華厳・天台・三論・法相・・・・・・・・・・・・四分律の十一宗（表Ⅱ〈a〉を参照）の章疏目録のおよそ一七〇部を列挙し、各宗の項に浄土宗徒としての必読の書を指摘・推奨して、諸宗の教系などを叙述しているものである。[21]

表（Ⅱ）

〈a〉浄土初学抄		〈b〉浄土宗立義事	
一	華厳宗	一	真言宗
二	天台宗	二	禅宗
三	三論宗	三	天台宗
四	法相宗	四	華厳宗
五	地論宗	五	三論宗
六	摂論宗	六	法相宗
七	大乗律宗	七	地論宗
八	真言宗	八	摂論宗
九	成実宗	九	倶舎宗
十	倶舎宗	十	律宗
十一	四部律宗	十一	大乗律宗
		十二	成実宗

とすると、両者の同異、すなわち、『浄土初学抄』と金綱集の「浄土宗立義事」との同異について、その一つの典型例として、表（Ⅲ）のごとく地論宗を以て示す。

表（Ⅲ）

「浄土宗立義事」	宗全一三巻二一〇～一頁
▽問、地論宗中明二往生浄土一耶、答、不レ爾也、此宗依△㋑憑華厳経疏七巻、涅槃経疏十巻、維摩経疏、勝鬘経疏、温室経疏、十地論疏七巻、大乗義章二十巻、已上慧遠大師造也	続高僧伝云、此宗章疏五十余巻云云、㋺此宗有二両家一、一者南地、二者北地、㋩南地宝意三蔵也、其後慧光其弟子上統、其弟子浄影寺慧遠也、以レ此為二祖師一、㋥北地菩提流支三蔵、其後道△㋭寵、以レ此為二祖師一、㋬但日本三論宗之人、兼三学此宗一而不レ為二別宗一、浄影大師者自欣二都率一既生二都率一雖レ然別造二無量寿経観無量寿経疏一而明二極楽往生一、但自宗所談者、教証二道六相円融等法門也、六相者、総別同異成壊之六相也、又大乗義章中多以二四宗一釈二法門浅深一、四宗者、一者立性宗、二者破性宗、三者破相宗、四者顕実宗也、立性者毘曇之意也、破性者成実之意也、破相者諸大乗空無之義也、顕実者真如法界随縁之義也、若人学二地論宗一不レ能レ通二達六相四宗之法門一者、慣二自宗祖師慧遠大師一、依二所製之大経観経等解釈一、可レ入二念仏往生之一門一也、△
▽地論宗△	
㋺此有二両家一。一者南地、二者北地、㋩南地者以二恵（慧）光一而為二祖師一、㋥北宗（地）者以二道寵一而為二祖師一。就二恵（慧）光一有二十人大弟子一。△	

（注）▽……△　浄土初学抄なし

『浄土初学抄』　石井教道編『法然上人全集』八三七～八頁

㈥ 南

㈤ 寶意三蔵 ― 恵（慧）光上統 ― 浄影寺恵（慧）遺▽恵（慧）光律師之孫弟子△

▽僧範 ― 道愚等是也△

㈢ 北

㈡ 菩提留支三蔵 ― 道寵（等）

㈠ 花厳経疏七巻

㈠ 涅槃経疏十巻

㈠ 維摩経疏（四巻）

㈠ 十地論疏七巻

㈥ 無量寿経疏一巻

㈠ 勝鬘経疏（三巻）

㈠ 大乗義章十四巻 已上恵（慧）遺。続高僧伝云、章疏五十余巻、云々

㈥ 観無量寿経疏一巻

㈠ 温室経疏（一巻）

㈤ 日本（本朝）三論宗人兼二学此宗一、立而之レ為二別宗一（也）。浄影大師者、自欣二都率一既生二都率一。（又）▽遺二誡門徒一、令レ修二都率之業一、因レ玆雖レ造二観経疏等一、（而）慇懃不レ勧二西方一（也）。是則己所レ不レ欲勿レ施二於人一者、此謂歟。但△（凡其）㈦所レ談者、教証二道、六相円融等法門也。六相者、惣別同異成壊之六相也。又大乗義章之中、多以二四宗一釈二（判）法門浅深一。四宗者、一立性宗、二破性宗、三破相宗、四顕実宗也。立性宗者、毘曇意也。破性宗者、成実意也。破相（宗）者、諸大乗（経）空無相義也。顕実（宗）者、真如法界随縁之義也。

（注）▽……△ 宗全なし

なお(1)……は文の継続の意が示されよう。

(2)㈠――から㈦――の部分が共通する。

酷似していると見て差し支えないところであろう。以下少なからず出入はあるものの、禅宗（『大乗起信論』を援引）を除く十一宗の総てが、『浄土初学抄』を下敷として成立しているということである。[22]

両者の細かな同異の検討等については、機会を改めるとして、しからば、金綱集は何ゆえに『浄土初学抄』を援引されたのであろうか。いうまでもなくその一つは、破立のための素材の提供であろう。そして、誤解を恐れずにいえば、その二つは、例えばかの天台大師も臨終の刹那には、西に向かって心静かに念仏を口ずさみつつ瞑目されたという、『智者大師別伝』[23]の記事等が常に念頭にあり、[24]諸宗皆願求浄土を説く『浄土初学抄』に深甚なる興味を持たれたがゆえの、発露の一端であったことであろうか。

㈢ むすび

以上極めて荒い論となってしまったが、〆くくりとして拙論の要点を述べるならば、

（1）金綱集の「浄土宗見聞」上・下中には、浄土宗関連の典籍がほぼ網羅され、その吟味も例えば「大集経月蔵分」の文、及び『浄土十疑論』等極めて正確である。

（2）金綱集には、宗祖が示される念仏破の年序的経過、並びに宗祖が謗法の根源であるという「准之思之」等についての叙述はなく、浄土三師破の展開を大きく試みている。

（3）金綱集の「浄土宗立義事」は、法然著の『浄土初学抄』を下敷として成っている。

等が挙げられよう。

「応永二十七年六月二十六日」の奥付けの有する「浄土宗見聞」上、そして、「嘉暦二年卯月十九日、申尅於テ二久遠

寺ニ書三写之ニ畢、早早書之間、文字誤可三万多ニ歟、此則甚深無レ極御法門也、敢不レ可レ及三外見ニ也、可レ秘可レ秘」との奥書のある「浄土宗見聞」下、にはかかる問題が存するのである。

現在の自己の所信の一端を述べさせていただいた。ご叱正を乞うものである。

〔注〕

(1) 宗全一三（例言一頁）参照

(2) 宮崎英修氏『不受不施派の源流と展開』（三九頁）・「日蓮聖人遺文の文献学的研究」（三六六頁『近代日本の法華仏教』所収）、宗全一三（例言一～五頁）、金綱集のそれぞれの巻末の奥書を参照されたい。

(3) 宗全一三（例言一～五頁）を参照されたい。

(4) 六五～六頁

(5) 渡辺宝陽氏『日蓮宗信行論の研究』（一三五～七頁）を参照されたい。

(6) 拙稿「金綱集の一考察」（四三九～四〇頁『日蓮教団の諸問題』所収）を参照されたい。

(7) 拙稿四四〇頁

(8) 拙稿四三七頁

(9) 三九～四三頁

(10) 四六～六六頁

(11) 四四二～五〇頁

(12) 仏教大系『選択集』（一五二～六〇頁）を参照されたい。

(13) 仏書解説大辞典（六―八九頁）、浄土宗大辞典（二―二九六～七頁）参照

(14) 島地大等氏「天台の浄土十疑論」（二五～九頁『六条学報』八号所収）、妻木直良氏「天台の浄土十疑論に就て」（三七～六二頁『六条学報』一〇〇号所収）、山本仏骨氏「安楽集と天台十疑論の交渉面」（一四六～五七頁『真宗研究』二輯所収）等を参照されたい。

(15) 日仏全二〇七頁（下）

(16) 浄全一五―三〇頁
(17) 恵全一―二三二頁
(18) 法然上人全集八三二～三頁
(19) 九九～一二九頁『法華文化研究』三号所収
(20) 二二～四三頁『大崎学報』一二八号所収
(21) 仏書解説大辞典（六―八〇～一頁）、浄土宗大辞典（二―三〇二～三頁）を参照されたい。
(22) 他は省略する。
(23) 大正蔵経五〇―一九六頁（上）
(24) 佐藤哲英氏『天台大師の研究』（六四～六頁）、石田瑞磨氏『浄土教の展開』（三〇～二頁）を参照されたい。